

## 野生のいぶき

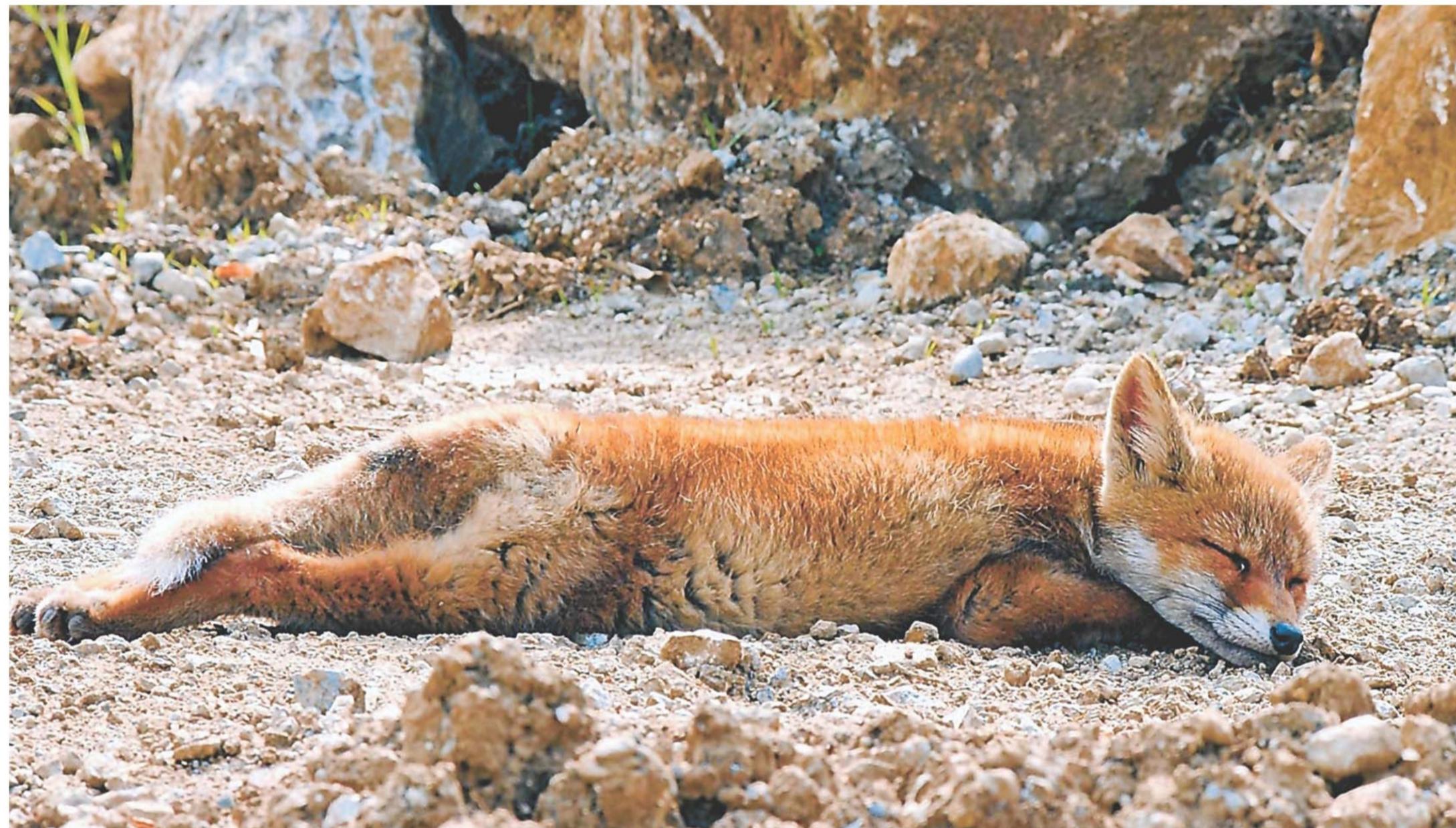
湖国のフィールドから

動物写真家 須藤一成

3

6月 キツネ

初夏、野生動物たちは子育てに忙しい。キツネも、ちょうど子育ての真っ最中だ。キツネは奥山から里まで広く分布している。人間の生活圏にも多くのキツネが暮らしているにもかかわらず、その姿を目撃することは少ない。それはキツネが人目につかないよううまく行動しているからだ。



林道脇でゆったりとひなたぼっこをする子キツネ

## 人の近くで大冒険

田んぼでじゃれあって遊ぶ  
※授乳するときも母キツネは周囲への警戒を怠らない

るからだ。注意深く観察していると、意外なほど身近なところで生き生きと暮らしている姿が見えてくる。キツネは山や平野部の地面を掘つて巣穴を作る。通路は長く複雑で、何カ所もある出入り口にながついている。その巣穴で、毎年4月ころに出産する。5月になると、やんちゃ盛りの子キツネたちは巣穴の外で行動することが多くなり、徐々に遠出するようになる。集落近くの田畑に出て来て、じやれあつたり寝転がつたりひなたぼっこしたりしている。

このよな子キツネの近くを通つても多くの人がキツネの存在には気がつかない。キツネは聴覚や嗅覚がものすごく鋭いので、足音や臭いなどで人間の接近をいち早く察知して、草陰に身を伏せて人間が通り過ぎるのを待つている。農作業をしている人も、すぐ近くに子ギツネがいることは気がつかない。遠くからその様子を見ていると、子ギツネた

ちの駆け引きが面白い。子ギツネたちは人が来るとまず姿勢を低くして動きを止めて様子を窺う。近くで農作業が始まつても、それ以上接近して来ないとがわかる遊びを再開する。近づいて来なれば、田んぼ脇の水路に入つて身を隠す。トラクターが近くを耕し始めても、水路は安全と決め込んで中に潜んでいる。無邪気な子ギツネと違つて母ギツネは用心深い。人の気配を察知すると、素早く身を翻して林の中へと姿を消す。田んぼ脇で授乳するところもあるが、背筋を伸ばしてまわりの様子を窺い常に警戒を怠らない。

5月下旬、林道脇の草むらで丸くなつて眠つている子ギツネを見つけた。2頭のうち1頭はすばやく逃げて行った。残つた1頭はそのまま眠り続けていた。その後も、この林道を通るといつて見えるが、耳だけはピンと立てて左右に動かしている。こちらの動きを首で判断しているのだ。僕が大きめ動くと目散に逃げるだろう。静かにそつと観察続ける。そのうちに子ギツネの緊張が解けてきた。カメラのシャッター音も気にしない。



すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に撮影に取り組む。米原市在住。写真集『Golden Eagle イヌワシ』(平凡社)など。



II 第3水曜に掲載予定